最後の講義

私の作家遍歴 II

小島信夫

潮出版社

最後の講義・私の作家遍歴Ⅱ
©一九八〇
検印廃止
定価　三五〇〇円
昭和五十五年十二月十日　印刷
昭和五十五年十二月十日　発行
著者　小島信夫
発行者　富岡勇吉
発行所　株式会社　潮出版社
東京都千代田区飯田橋三―一―三
電話　東京(03)230〇七四一(販売部)
230〇七八一(編集部)
振替　東京五―六一〇九〇
郵便番号一〇二
乱丁・落丁本は送料弊社負担でお取り替えいたします
印刷　大日本印刷株式会社
製本　株式会社鈴木製本所

最後の講義・目次

20 私のイワンが東洋の海を……7
21 皇帝の使者……31
22 もう一人の使者……61
23 対　面……89
24 世界の泣き虫小僧……116
25 母のいない幼年時代……141
26 家庭の幸福……168
27 鳶とうずら……193
28 完全な幸福……221
29 目を細めるアンナ……247
30 答えられぬ質問……273

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

31 さらば何をなすべきか……300
32 クロイツェル・ソナタ……326
33 妻への手紙……352
34 馬鹿と悪魔……377
35 ほんとに、芸術とは何か……401
36 戦場の幸福……424
37 馬のそばにいた者たち……447
38 青く高い空……472
39 八雲、最後の講義……497
40 平凡な少女の傑作……521
41 甘美な奉仕……543

索引

『黄金の女達』
私の作家遍歴Ⅰ

黄金の女達
夢のなかの出雲の女
熊本のヘルン大家族
日本のもう一つの顔
日本の河
藍色の想い
椰子の下の夢
チェンバレン教授の眼
節夫人との結婚の秘密
もう一人の帰化人
東は東、西は西
ぼくは別人だ
ナポレオンの悩み
モンテ・クリスト伯邸の伊万里焼
野蛮にして聖なる隣国
復　活
近づくハムレットとドン・キホーテ
困窮文士学者救済会
腹を立てた外人女性

『奴隷の寓話』
私の作家遍歴Ⅲ

天才の伝記はなぜ短いか
家と旅との変り目にこそ
円をえがきつつ
ファイサネス島の結婚式
夢魔の化身
愚者と賢者
もう一人の自分
影を売った男
奴隷の寓話
スキャンダルの意味
対等であること
めざましい創意
自分はどこにいるか
仮面舞踏会
見過ごされる出来事
トレド市内の機屋
サンチョ・パンサの悩み
みんなが彼らの名を知っている
舞台と楽屋の境界
三人の画家
私のことを分ってくれ
誘惑する才能
危険な手紙
幕がおりるまで

装幀・田村義也

最後の講義　私の作家遍歴 II

私のイワンが東洋の海を

ゴンチャロフはプチャーチン提督の秘書官として一八五三年、嘉永六年に日本にやってきた。これは有名な事件である。私は第一巻の最後のいわゆる「私の年表」の中にゴチック体にして記入した。

ゴンチャロフは日本に来たばかりでなく、そのときの模様を一冊の旅行記に残していて、これは和訳されて文庫にまで入っているばかりか、くわしい解説文までついたものが、「異国叢書」に入っている。この叢書そのものは、もともと戦前に出ていたものであるが、最近新しい版のものが刊行されている。

要するに、彼らは、北辺領土の問題、つまりクナシリ、エトロフなどの問題をはっきりさせるためと通商条約を結ばせるためにアフリカまわりでやってきたのであった。幸いこの旅行記があるのに加えて、ゴンチャロフという人は、有名な小説を二つ発表した。小説は日本にもかなりの影響を及ぼした。トルストイやツルゲーネフやドストエフスキーほどではないが、早くから二葉亭四迷がそのことを訴え、自分も真似をして処女作を書いた。これが日本で最初の近代小説となり、明治の小説の手本となったのだから、そのもとであるゴンチャロフは不思議な役割を果した人である。

前にもいったかもしれないが、二葉亭はゴンチャロフが前にあげたロシアの作家たちほど認められぬ風潮に対して、それは間違っている、といった。そうしてゴンチャロフという作家は人間の理解が実に深くて、一人一人の違いというもの、つまりこの世の中にはさまざまな人間がいるということを、なるほどと思えるように書きわけて見せてくれる、というようなことをいっている。

ゴンチャロフは一種の物臭太郎であり、三四郎であるところの『オブローモフ』という小説を十年かかって書いたが、彼自身もまたある程度物臭太郎的であったに違いないと思われるのに、その途中で旅立ったのであった。その事情は一応前回で書いた。一口でいうと彼はそれまで頭の中にしまっておくに過ぎなかったことを、あえて大実行したのであった。それがいかに大実行であるかということは、これから話す私の話でもお分りいただけると思う。なにしろ嘉永六年のことである。

だが、私のゴンチャロフのことを書こうとする目的は、前にもふれはしたが、ゴンチャロフはほかの作家たちと同じように、その頭の中で世界を築きあげ、ほんとに生甲斐をかんじるために出発したのであった。それはドストエフスキーがシベリアの監獄にちょうどいるときであったけれども、ゴンチャロフのほうも一種のシベリア行きのようなことを自ら思い立ったのであった。この人はさっきもいった通り、一人一人の人間を書きわけるのにたけているというような文学者だったから、急に世の中を改革しようとして危険なことをしでかすということには向かなかった。だから別な方法で「シベリア行き」というか監獄行きの実行を思い立ったのであった。事実、この人は、長崎へ近づいてくると、たちまち日本人のことを「監獄に囚われている」ようなと感慨をもらした。長崎湾内にじっと待ちつづけねばならぬ自分たちのことを、囚人のようだ、といったりした。そうかと思うと、小笠原諸島にくる前に大暴風にあったときにも同じような感じの文章を書いているのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

半時間もすると、斜桁帆がもぎとられた。ついに前檣の桁にかかる帆も真二つに裂けた。事態は深刻なものになりつつあった。だが、もっとも深刻な事態はまだ先にあった。帆はどうにか他のものに取り替えられた。夜の七時頃、とつぜん、指揮官たちの顔に特別の警戒心が現われた——それにはわけがあった。横静索が弱り、細索がずり始め、大檣（メイン・マスト）が今にも崩れ落ちんばかりにぐらつきだしたのである。

メイン・マストが一体いかなるもので、それが倒れたらどういうことになるかお分りだろうか？メイン・マストとは長さおよそ百フィート、重さ八百フントになんなんとする丸太で、それがその頂から舷側の綱に向って張ってある太い藁（わら）の綱、つまり横静索で支えられているのである。君たちの住いが何かの塔の土台の近くにあって、それが崩れ落ちんばかりであると想像してみていただきたい。かりにその塔がどの方角に倒れるかが分っているとしても、君たちはもちろん、一露里から先へ逃げ出されるであろう。ところが、ここは船の上なのだ！

船の上だから逃れることは出来ない。囚われているのだ、といっているように見える。

ゴンチャロフは秘書であり観察記録係であるという意味では、ベッドにしがみついて離れないところのロシアの物臭太郎オブローモフにとてもよく似ている。ところが、とにかく世界旅行に出発し、海の上の船の上にいるのである。船もしがみつかねばならないということでは、これまた新しいベッドみたいなものであるけれども、これは安全であるどころか、危険な環境なのだ。

ドストエフスキーが、六フントの足枷（あしかせ）をつけてシベリアへ、そしてゴンチャロフが小笠原諸島近辺

で暴風雨の中を、八百フントのメイン・マストの前におびえていたときには、ロシアという国は、つまり皇帝や皇帝を中心とした政府や軍部は、南進をはかっていた。こういうことを、読者よ、虚心に、眼をつぶってとくと考えていただきたい。ここに何ともいえぬ不思議な、一筋縄ではいかぬ、むつかしい、そうして平凡な真実の問題がある。

やがてあとあと検閲官となって国内文学に政府を代弁してかなり厳しい眼を光らせはじめたゴンチャロフが、プチャーチン提督のひきいる艦船に乗ってやってきたということは、この間の事情を端的にあらわしていると諸君は合点がいくであろう。だが、ドストエフスキーが、とにかく将校であったことを忘れるわけにはいかない。それより何より、私が先回の「私の年表」に記載しておいたように、セヴァストーポリの防御戦に参加したのは、トルストイであった。このことは国が違うとか、時代が違うとか、貴族社会が存在したり、軍部が存在したりした頃の、要するに私どもと無関係の世界のことであるには間違いないけれども、要するにそういうぐあいにロシアという国は出来ていた。

私はさっき自ら進んで地球を一まわりして囚われに出むいたといったけれども、日本にきてから、この一行はロシアが英仏と戦争をはじめていることを知ったので、いつつかまるかもしれないことに気づいたのだ。まさかイギリスとフランスを敵にまわしてその速いスクーナ船なるものに追いまわされては到底、彼らのフレガート艦は太刀打ち出来ぬのであって、暴風雨にやられて荒れ狂うけもののような波浪に洗われぬとしても、さもなくばメイン・マストの下敷になってあえなくおしつぶされてしまうような破目に陥らぬとしても、別の危険が待っていたのであった。このとき文人のゴンチャロフは、プチャーチンから覚悟するようにと引導をわたされた。そして危険なことは、帰途に起ったのだ。そのときほんとうに英仏の艦に追っかけられた。間宮林蔵が、樺太は島であることを発見してお

り、ロシア人のネヴェルスコイがそのことを四十年後（一八四九年）になって確かめたので、英仏艦隊が袋のネズミにしたと思いこんだのに、海峡を抜けて、ゴンチャロフの仲間の乗った艦は逃げのびたのであった。だがそのあと、まだ辛苦はたえず、ここで多くの死人を出した。

これはあとでまたふれることである。これからもゴンチャロフの文章を紹介するつもりだが、いったいこの人の文章を読んでいて、ふと眼を現実世界に向けると不思議なことに、生き生きして見えてくるのである。はじめて出会った人や、以前に出会った人たちが、一人一人に画然たる輪郭をもって浮びあがってくるのみならず、その人たちが、それぞれそこにいることが面白く楽しく、そうして、その人たちが厳として自分は自分であって、少々のことでは生き方も歩き方も考え方もしゃべり方も変えやしないぞ、といわんばかりに見えてくる。私が前回ので新幹線の中でゴンチャロフを読んでいることを書いたのは、そのことをいいたかったのであった。そのあとミス・スクェアチャティにあったり、そのほかの大阪の人たちとあったりしていると、私には自分がゴンチャロフになったみたいに、躍動して見えてくるのであった。私が未知の人にあったからそう見えたとしても、しかもやはりゴンチャロフの功徳であることにはほぼまちがいないように思える。私はほんとうは、そういうふうに見えたように前回の私の文章を書くべきところであった。

私はさっき少々のことでは自分の枠から外へ出ないというようなことをいった。これは、人物というものが、すべっても転んでも、その性格を変えないということも関係がある。小説など人物をえがくということは一般にそういうことなのだ。それだけなら何も珍しいことではない。それなら何故ああなのだろう。理解しようしようと見つめ考えた。その結果だ。というのなら、いったい何を見つめたのだろうか。人間の矛盾を見つめたということであろうか。もちろんそうだ。それならその矛盾と

はどんなふうの矛盾なのか。それは自分の状態から出よう、逃れようと思い、逃れたときの楽しさまで想像するくらいなのに、いざというとまた引っこんでしまう。一口でいえば別の存在になろうとしながら、なかなかそうはなれぬ、ということ、そのことをこそ、彼は見つめていたともいえる。

自分自身の中にもそういう厄介な人間がいることがわかっていた。そういう人物はあちこちにいたであろうが、おそらく自分の中にいることをよく知っていたのであろう。そこで、彼ゴンチャロフは、それを人物化し典型化するのに、時間をかけて見つめていたのであろう。具体的にどんなあんばいにその操作が行なわれたかということは分らない。しかしベッドからどうしても出ないという極端な人間、出そうになって出ることが出来ぬ口実を作り出してしまう（物臭というものは、だいたい口うるさく、また口実を作るのがうまいものである）あやしげな男に仕立てたときに、見つめ方の軌道がしかれた。

物がよく見えるということは、絵のようによく見えるということだ、というふうに普通考えがちだ。それは、そういってもいいのだが、ほんとうは、自分のことがいつも冷静に見えてくるということで、それがために反射して自分のまわりのものがよく見えるということなのである。見るベースはもともとは、知らぬうちに自分自身の中にある。

自分を見る痛々しさは、線の太い大げさな思いきった典型の中に変えてしまうときに、自分の中に住んでいたことも忘れてしまいそうになり、事実ほとんど忘れてしまい、かえって和やかに生きてくる。自分の中の矛盾は楽しく生きてくる。そうした太い輪郭の中へ転化出来たからといって、大ざっぱなというわけではない。矛盾の妙味は安心して細部にわたり区分をかさね息づいてくる。

ゴローホワヤ街の、相当な県庁所在地にも匹敵するほどの人口をもった、一軒の大きな建物。そのなかの自分の住居で、ある朝、イリヤ・イリイッチ・オブローモフはベッドのなかに寝ていた。

それは三十二、三歳ぐらいの、感じのよい風采をした中背の人物で、暗灰色の目をもっていたが、顔の輪廓には確とした思想も、打ちこんだところも、何ひとつなかった。思想は自由な小鳥のように顔のおもてをさまよい、目の中で羽ばたき、半開きの唇にとまって、顔の皺にかくれるかと思うと、やがてすっかり消えてなくなる。すると顔ぜんたいに、のんびりした、平板な光がほのぼのと浮んでくる。のんきさは顔から全身のポーズにひろがり、部屋着のひだにまでひろがって行く。

ひょっとすると彼の顔が疲れとか、退屈とかいった表情にくもることもあるが、しかし疲労も、退屈も、一分間も顔から柔かさを追いはらうことはできなかった。この柔かさは支配的、基礎的な表情であって、それも顔ばかりでなく、心全体の表情であった。

とこんな具合だ。きいている者が、分ったという顔をしかかろうものなら「いやまだ分っていないはず、なぜなら分らせてはいないからです」というかのように、続けられる。

「その程度の理解では、まだまだ真相は分っているとはいえない。それはこんな男なんかどうでもいいと思っているからでしょうよ。ひいては愛情がないとそしられても仕方がございませんよ。つきあいが足りないというか、自分のことにかまけて、他人のことに無関心な証拠ですよ。そんなことでは、あなたも他人に理解されなくても文句はいえないし、あなたは一口にいって、人間さまではありませんよ。」

といった調子にゴンチャロフは、私がいま紹介した『オブローモフ』第一部の冒頭の部分の何倍も

かけて語ってくれる。そうしてガウンの話が長々と続き、オブローモフ本人ばかりでなく、作者までそれこそ「安心して」愛着を示すのである。

オブローモフの目から見ると、このガウンははかり知れないほどの長所をたくさん持っていた。それは柔かくて、しなやかで、肉体はそれを着ていることを感じないほどだった。ガウンは従順な奴隷のように、どんなかすかな動作にも従うのであった。

こういうふうに引用していたら、何頁かけてもすまない。この男が「いつになくたいへん早く八時頃に目をさます」までにはまだまだ果てしなく紹介は続くからである。こうしてオブローモフは、作者の身にあまる愛情をあまりにもたっぷりとうけて、身体がふやけてそのためにこそベッドから起きあがれないかのようにさえ見えるのである。

ここまできたらどうしても下男ザハールにもおつきあいを願わぬわけにはいくまい。どっちみちゴンチャロフは『日本渡航記』の中で日本人のなかにこうしたザハールみたいな男を発見し描くことになるからである。といってみたところで、私は果してどれだけこの下男について語ることが出来ようか。九時半になると、というより時計が九時半を打つと主人は仕事を思い出して呼びつける。

「ザハール！」と彼は叫び立てた。(彼はベッドの中にいるままであることに注意)

イリヤ・イリイッチの書斎から、小さな廊下を一つはさんだ部屋で、まず番犬のうめきのようなものが聞え、それからどこからか飛びおりる足の音が聞えた。それはいつものように居眠りにふけ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com